



東洋の同化的（同化的）天観

The Eastern Assimilative View of Heaven

目次

1. 天(天)概念の二重性
2. 神(神)概念の区分
3. 東洋の三才観: 同化的(同化的)天観
4. 応縮的(凝縮的)地観と接化的(接化的)人間観
5. 西洋思想との比較
6. 陰陽五行と相關的思惟
7. 東洋の神明体系
8. 天地之用(天地之用)と12運星
9. 儒仏仙と天地之用
10. 結論および意義

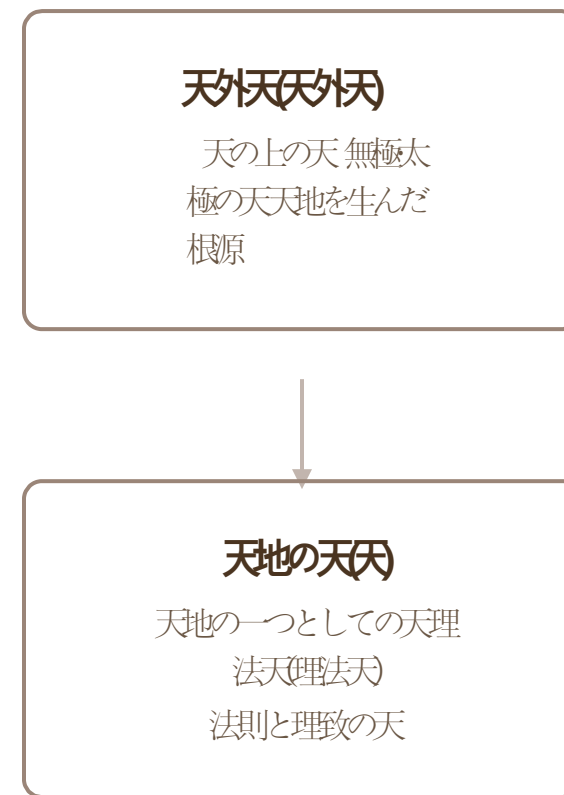
天(天)概念の二重性

東洋の天概念は二つの意味に区分して理解する必要がある。

第一に、「天地」に区分されたのちの天・天地のうち一つとしての天であり、性理学では理去天(理去天)と呼ばれ、理致と法則の側面が強調される。

第二に、「天外天」としての天:天地を生んだ無極・太極の天であり、天の上の天を意味し、万物の根源的存在である。東学思想では上帝あるいは天主と表現される。

こうした天概念の両義的使用は、東洋の天観・地観の議論を理解しがたくする原因ともなる。



神(神)概念の区分

東洋思想において神(神)概念もまた、天(天)と同様に両義的に使用される。

上帝(上帝):天外天に対応する神であり、天地を作った究極的存在を意味する。
東学思想では「天主(天主)」とも表現される。

神明神明:天外天が作った天地の中で天地を運行する主体としての神を意味する。陰陽五行の法則に従って各々固有の領域を持つ。

東西洋の差異西洋は統一的に神を天外天の上帝のみを主に強調したのに対し、東洋では神明を含む複合的概念として発展した。

東洋の神概念

最高神(上帝)+ 天地神明+ 祖上神

西洋の神概念

唯一神(絶対神)中心

上帝(上帝)

天外天に対応する新天地
を作った根源的存在 東
学思想の天主



神明神明

天地を運行する主体 陰陽五
行の法則に従う各々固有の
領域を保有



祖先神

東洋の三才観 同化的(同化的)天観

三才観(三才観)とは? 天(天)地(地)人(人)の関係を説明する東洋哲学の基本体系である。

同化的(同化的 assimilation)天観天円地方(天圓地方)、天道地徳(天道地徳)に代表される陰陽原理において、天観は異質的要素を一つに統合する同化の属性を持つ。

同化とは、自己を中心に外部へ向かって絶えず拡張する力を意味する。異質的なものを統合しつつも主従関係を形成して秩序を作り出す特徴がある。

東洋の精神文化である儒仏仙にも同化の性格が現れる:

- 道教-自然に同化
- 儒教-内面に同化
- 仏教-法に同化



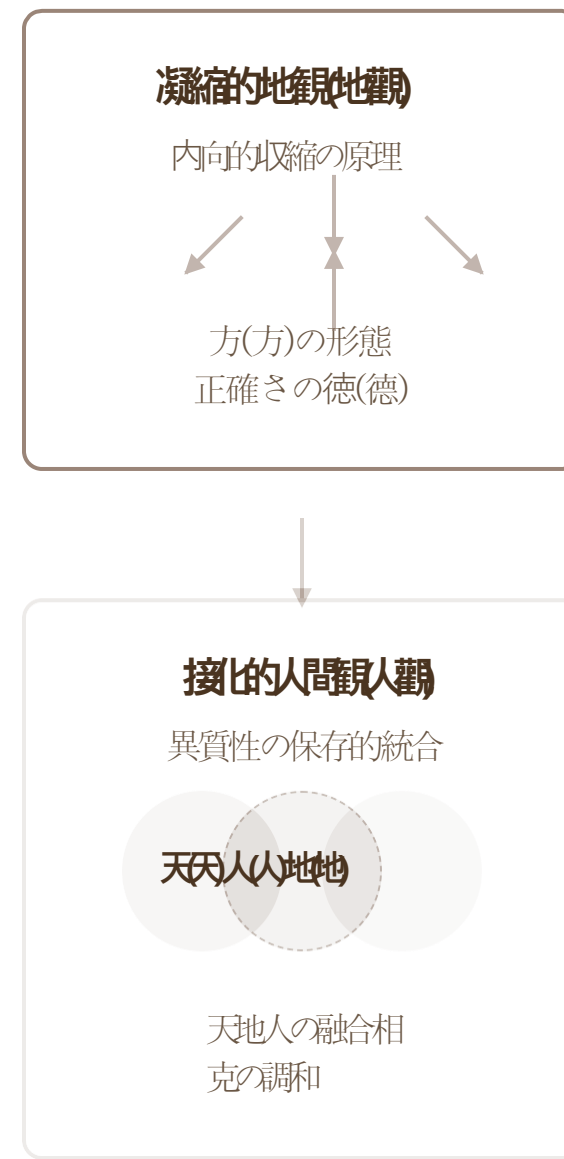
凝縮的(凝縮的)地観と接化的(接化的)人間観

凝縮(凝縮)は、天円に対する地方、天道に対する地徳に現れる特性であり、互いに異なる要素が一つに絡み合って固まる現象を意味する。

- 凝縮の特徴同化と異なり成分そのものは変わらず、異質的な存在を圧縮して一つの小さな統一体を成す。内部へ向かって収縮する力を持つ。

接化(接化)は、互いに対立的な存在が仕合って一つに融け合うことであり、二つの存在が対等に出会い異質性を保存する統合を意味する。

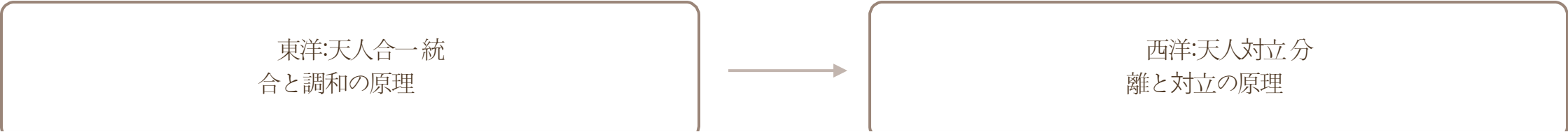
- 接化の特徴相対の融合として混合主義を志向する。天円と地方の融合、天道と地徳の融合により人間の属生を形成する。



西洋思想との比較

東洋と西洋の天観・地観・人間観は根本的な思惟方式の差異を示す。

	東洋思想	西洋思想
思惟方式	生成論的(生成論的)	存在論的(存在論的)
天観(天観)	同化的(同化的) 万物を一体として統合	形相的(形相的) アリストテレスの形相
地観(地観)	応縮的(應縮的) 異質的存在の圧縮	質料的(質料的) アリストテレスの質料
人間観(人観)	接化的(接化的) 対立的存在の調和	成長論的(成長論的) 個体の成長と発展
特徴	属性中心の変化相 関的思惟、統合志向	実体中心の変化異 化(異化)、分化(分化)



陰陽五行と相関的思惟

相関的思惟は東洋天觀の核心的特徴である。陰陽五行の法則は物質のみならず神明(神明)にも適用される。

陰陽・三才・五行・八卦は起源は異なるが、同一の三才を見なす観点の差異であり統合的体系を形成する。

相関的思惟は実体的な西洋の思惟とは異なり、属性中心の天觀を形成し、万物と神明に一貫した法則として作用する。

邵康節の加一倍法(加一倍法)に従い、これらは三才を細部にわたって解釈する統合的原理となる。



東洋の神明体系

東洋の神概念は西洋の絶対神とは異なり、複合的体系から成り立っている。

- 東洋の神は最高神(上帝)、天地神明、祖先神に区分される。
- 西洋の天使とは異なり、宇宙万物に数多くの神明が存在し、これらはそれぞれの領域で陰陽五行の法則に従い宇宙を運行する。
- 上帝は神明の事に干渉せず、東洋では最高神が非人格化された法則に近く認識された。
- 人間が死んで成る祖先神は天地の運行には関与せず、人間の子孫が神明と結合することを管掌する。
- すべての神明は陰陽五行の秩序の中でそれぞれの役割を遂行する。

上帝(上帝)

最高神、天外天の神 天地を創造した根源的存在



天地神明(天地神明)

宇宙運行を管掌する神的存在 陰陽五行の法則に従う領域分担



祖先神(祖上神)

死後に人間となる神子孫の修道と神明の結合を管掌

天地之用(天地之用)と12運星

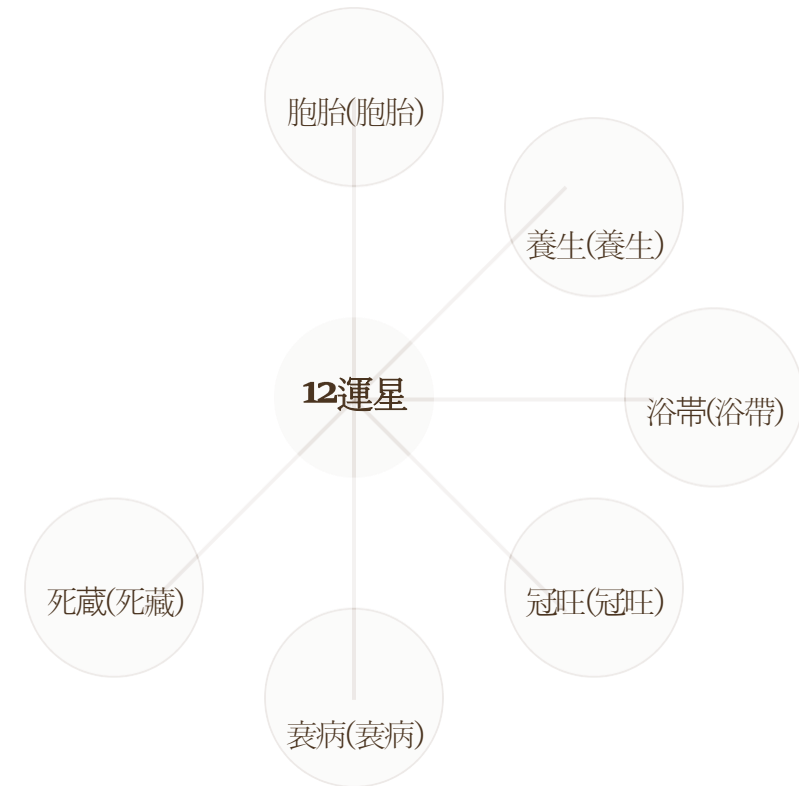
天地之用は天地の運行と作用を意味する。

天地に配置された十干(干)十二支(支)は、天地化育(天地化育)のために天地昇降(天地昇降)を通じて天地の用である十二運星(運星)の作用をなす。

十二運星は次のような生命循環の段階を表す:

- 胞胎(胞胎):生命の種が地に蒔かれる
- 養生(養生):地が生命の種を育てる
- 沐帶(浴帶):種が天の雨露(雨露)で沐浴する
- 冠旺(冠旺):旺盛に活動する時期
- 衰病(衰病):気運が弱まり病むこと
- 死蔵(死蔵):死と保存

これは生命の誕生と成長、消滅までの全過程を含んでおり、キャンベルの原質神話十二段階や十牛図のような過程を示す。



天地之用の意味

十干十二支が物理学の原子に相当するなら、天地の用である十二運星は原子が結合し新たな性質が現れる分子に相当する。天地の運行が単純な機械的作用ではなく、誠敬信(誠敬信)によるものであることを示す。

儒仏仙と天地之用(天地之用)

東洋の思想体系である儒仏仙は、天地の用(天地の作用)を反映して形成された。

道教(仙道)天地の胞胎(胞胎)を反映した虚無の思想であり、自然に同化する特性を持つ。

仏教:天地の養生(養生)を反映した寂滅の思想であり、法に同化する特性を持つ。

儒教:天地の浴帯(浴帯)を反映した以詔(以詔)の思想であり、内面に同化する特性を持つ。

このように東洋の三思想は天地の用の異なる側面を反映しつつも、いずれも「同化」という共通の特性を持つ。



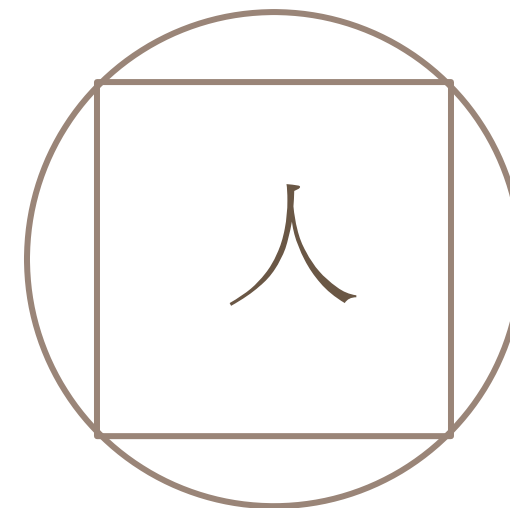
結論および意義

東洋の同化的(同化的)天観は次のような特徴と意義を持つ:

統合的世界観東洋の天観は万物を一体に統合する同化的特性を持ち、分析と支配よりも自然と人間の調和を追求する。

属性中心の思惟西洋の実体論的思惟とは異なり、東洋は陰陽五行の属性で変化を説明し、各単位内部で統一的構造を示す。

現代的意義東洋の同化的天観は、現代社会の機械論的世界観の限界を超え、有機体的自然観と和解の哲学を提示する。



天(天)地(地)人(人)和(和)

- 同化的(同化的)天観
- 凝縮的(凝縮的)地観
- 接合的(接合的)人間観